

西谷五か村の暮らし

白山麓西谷五か村（杖村・小原村・丸山村・須納谷村・新保村）は奥山に位置したため、日陰が多い谷間で年中寒さが強く、田が少なく山畑が中心であった。大雪・大雨・大風による作物の不作、雪解けや大雨による洪水のために耕作地が減少するなど、天候に左右されることが大きかった。宝暦五年（一七五五）には気候不順による大悪作と大雪により多くの餓死者を出している。このように、大凶作により餓死者を出すなど、自然条件は大変厳しいものがあった。しかも支配体系が周辺村々とは異なる幕領に属しており、政治的にも大きく制限されていたのである。

産業生産面では、平野部の農村とは異なり山間部に位置し、焼畑耕作を主要な生業としていたため、一般的に自

給自足的傾向の強い村々と思われるが、

である。しかし、塩などの自給できない生活必需品を購入するため、生産物を移出するなど商品生産と流通の活発な一面をもっていた。西谷五か村では、生糸・蚕・蒲脛巾・炭・鋤柄・杉板・小羽・布・薪などを生産し、近村や小松町へ売り出し、冬期の積雪時には村外への出稼ぎも行われ、大きな収入源となっている。特に生糸・蚕は最も手近な現金収入として盛んに行われていた。このように焼畑耕作を中心しながらも、蚕・生糸を中心とした多様な農間余業が展開していたのである。西谷五か村では、村と村との間で山境をめぐる争論が多く起きている。また個人の争論も持山や木の伐採に関わることが原因で争論となることが多か



宝暦8年(1758) 白山麓十八か村大悪作に付稗拝借願(山岸家文書)

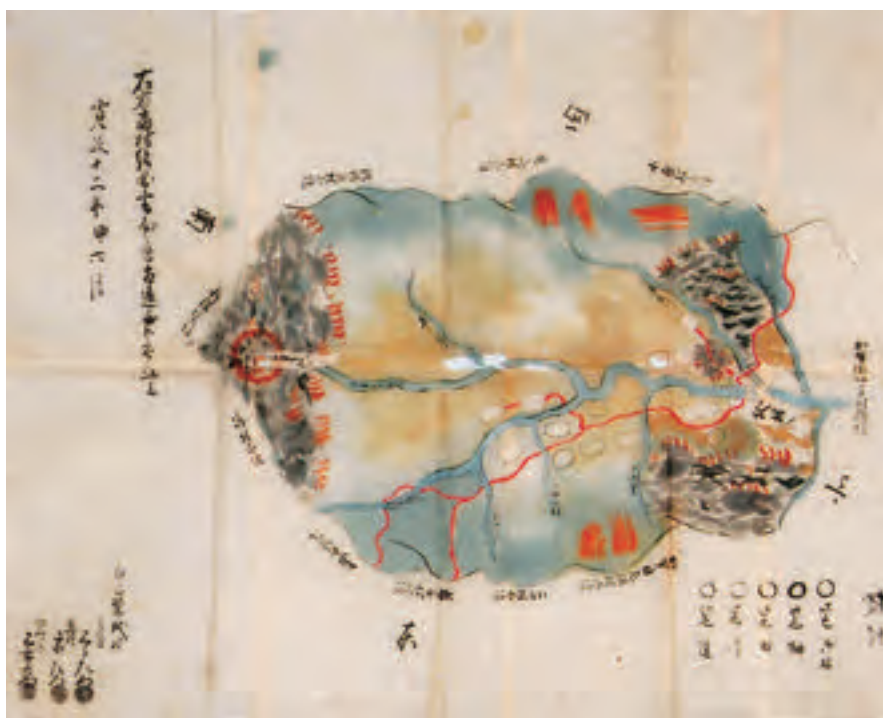


大日川ダムより大日山方面を望む(平成22年9月撮影) 大日川流域に西谷5か村はあるが、小原村・杖村は大日川ダムの建設に伴い廃村となった

った。元文四年(一七三九)須納谷村と新保村との間で山境争論が起こり、寛延三年(一七五〇)に決着するまで長い時間と多くの費用が掛かっている。山間部に位置する村にとって、山境争論は生活に直結する問題でもあった。一方橋普請の時、村から人足を出したり、村内で家の普請があったとき屋根

葺きに人手を出すなど、村同士、村人同士が互いに助け合う共同体としての一面もあった。また、西谷五か村には寺院は一寺もなく、その役割は道場が果たしていた。特に「新保詣り」と言われるように、新

保村春木家に伝わる本尊をお参りするため、近隣近在はもとより、越前勝山からも多くの人々が集まり、信仰と共に交流の場ともなった。(袖吉正樹)



寛政12年(1800) 杖村絵図(山岸家文書) 道筋や川筋など杖村の様子が具体的に示されている